

図説脳神経外科 ~second edition~

(第43回)

下垂体細胞腫の稀な一例

菅田 淳¹⁾ 藤尾 信吾¹⁾ 牧野 隆太郎¹⁾ 花田 朋子¹⁾
野口 紘嗣²⁾ 谷本 昭英²⁾ 花谷 亮典¹⁾

¹⁾鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 脳神経外科学

²⁾鹿児島大学病院 病理部・病理診断科

【はじめに】

間脳下垂体腫瘍において、下垂体前葉から発生する下垂体神経内分泌腫瘍(PitNET)がその大部分を占めるが、下垂体後葉および漏斗部から発生する腫瘍も存在する。WHO分類第5版では、下垂体後葉腫瘍として下垂体細胞腫、紡錘形膨大細胞腫、顆粒細胞腫、上衣下垂体細胞腫が挙げられており、いずれも thyroid transcription factor-1(TTF-1)が核内に陽性を示すことから、共通の後葉由来の起源を有すると考えられている。その頻度は全下垂体腫瘍の0.2%程度であり、極めて稀な腫瘍である¹⁾。臨床症状は非機能性PitNETと類似し、視機能障害、頭痛、下垂体機能障害などを呈するが、特異的

な所見には乏しい。WHO grade Iに分類される良性の腫瘍群であり、手術加療が第一選択となる。今回、当科において2010年以降で初めて下垂体細胞腫と診断された症例を経験したため、報告する。

【症例】

30歳代女性。手関節ガングリオン摘出術、帝王切開術の既往あり。ADLは自立。以前から頭痛があり、近医で頭部MRI検査を受けたところ、下垂体腫瘍を指摘されたため当科紹介となった。初診時、意識清明、明らかな神経症状を認めず。血液検査では、内分泌学的なホルモン異常所見を認めなかった。頭部造影MRIで、トルコ鞍から鞍上部にかけて最大径20mmの下垂体腫瘍を認めた(図1)。明らかな視

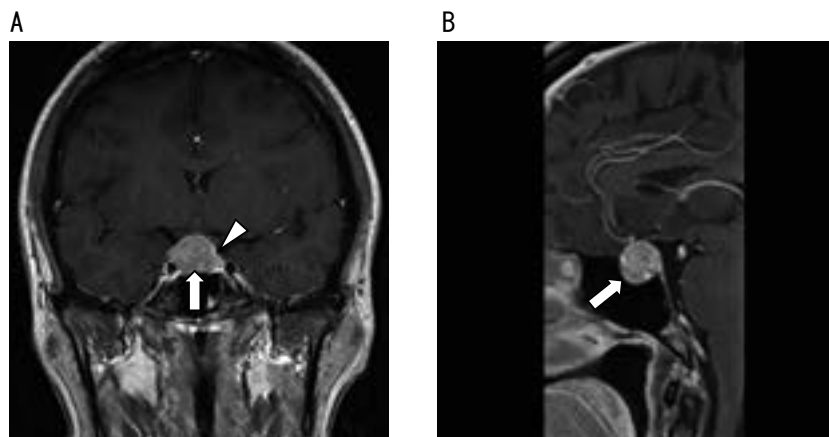


図1：術前頭部MRI造影T1強調画像 A：冠状断 B：矢状断
トルコ鞍内から鞍上部にかけて最大径20mmの下垂体腫瘍を認める(矢印)。正常下垂体は主に左側に圧排されている(矢頭)。

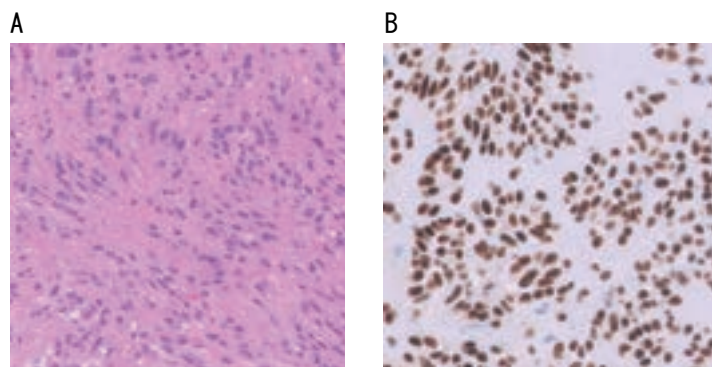


図2：病理組織検査 A：HE染色。類円形の腫大核と豊富な細胞質を有する紡錘形の腫瘍細胞が充実性に増殖している。
B：TTF-1染色が核内に陽性となっている。

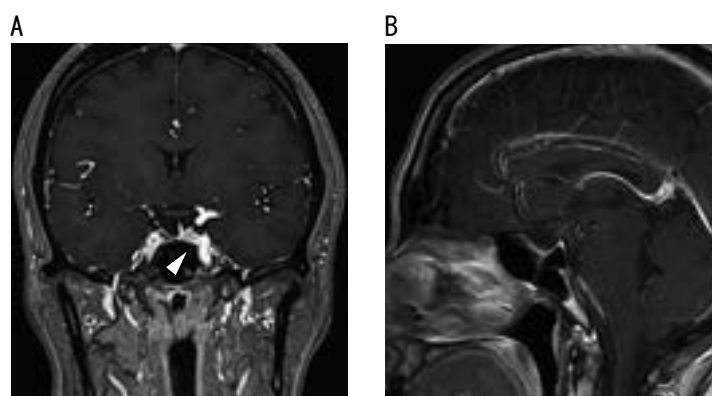


図3：術後頭部MRI造影T1強調画像
A：冠状断 B：矢状断
明らかな残存腫瘍を認めず、鞍内左側に正常下垂体が確認できる(矢頭)。

力・視野障害を認めなかったが、腫瘍は視路に接しており、手術加療を行う方針とした。当初、非機能性PitNETを疑っていたが、経鼻的内視鏡下下垂体腫瘍摘出術を行ったところ、多くのPitNETと異なり、腫瘍はfibrousで比較的硬かった。腫瘍自体は多血性ではなく、術中の出血コントロールに難渋することはなかった。徐々に摘出をすすめ、肉眼的に腫瘍を全摘出した。病理組織検査では、HE染色にて類円形の腫大核と豊富な細胞質を有する紡錘形の腫瘍細胞が充実性に増殖していた。免疫染色では下垂体前葉ホルモンはいずれも陰性であったが、TTF-1が核内に陽性であり、下垂体細胞腫と診断した(図2)。術後経過は良好であり、新たな神経症状や下垂体機能障害の出現はなく、現在も外来フォロー中である(図3)。

【考察】

下垂体後葉腫瘍の術前画像診断において、腫瘍内のT2強調画像のflow voidの存在やダイナミック造影MRIのより早期の造影効果が手掛かりとなることがあるが、特異的所見には乏しい。放射線学的特徴に基づいて非機能性PitNETと下垂体後葉腫瘍を術前予測しようとする試みもあるが、必ずしも容易ではない²⁾。下垂体後葉腫瘍の治療において、薬物治療や放射線治療の有効性は確立されておらず、手術加療が第一選択となる。一方で、下垂体後葉腫瘍は硬く周囲の組織に癒着している場合があり、全摘出が難しくなる³⁾。また、下垂体後葉腫瘍は非常に多血性であることが多く、そのため、術中の大量出血や術後出血が問題となる⁴⁾。今回、幸いにも我々の症例は術中の出血量は多くなかった。しかしながら、術前にひとたびその存在が疑われたら、術前

の脳血管造影検査による栄養血管の把握や、術前の十分な輸血の用意や止血方法の準備が必要となると考えられる。

【引用文献】

- 1) Castellanos LE, et al. Epidemiology of common and uncommon adult pituitary tumors in the U.S. according to the 2017 World Health Organization classification. *Pituitary*. 2022 ; 25 : 201 – 209.
- 2) Jin S, et al. Preoperative Prediction of Non-functional Pituitary Neuroendocrine Tumors and Posterior Pituitary Tumors Based on MRI Radiomic Features. *J Imaging Inform Med*. 2025
- 3) Guerrero-Pérez F, et al. Primary tumors of the posterior pituitary : A systematic review. *Rev Endocr Metab Disord*. 2019 ; 20 : 219 – 238.
- 4) Lefevre E, et al. Management of pituicytomas: a multicenter series of eight cases. *Pituitary*. 2018 ; 21 : 507 – 514.